



農学部学生による災害ボランティア活動の記録

農業生産科学科 荒谷明日兒

農学部では7.13水害および中越大震災の被害に対して、学務委員会およびフィールド科学教育研究センター（FCセンター）企画交流部が中心となって、独自の学生ボランティア活動を行った。本稿はこれらの活動の記録である。

1. 7.13水害に対する学生ボランティア活動

(1)なぜ農学部は独自のボランティア活動を行ったのか

2004年7月13日とそれに続く数日間の豪雨は新潟県内、特に中越地域に甚大な被害をもたらした。五十嵐地区においてはそれほど雨とは思えなかったが、テレビで刻々と放映される現場の様には驚きを隠せなかった。その後、学務委員長として私は「学生を動員して、何か被災地のお手伝いができないものか」と考え、同じ考えを持つFCセンター企画交流部長福山教授と相談し、7月21日の教授会において提案したが、大学全体として学生ボランティア活動を行うとのことだったので、農学部独自の活動は見合わせた。

しかし、福山教授はじめ多くの先生方が災害現場調査に出かけられるようになったことから、農学部独自の情報が入り始め、農業生産科学科では7月26日、1年生向けのスタディスキルズの時間を一部割いて、福山教授にお願いし、災害状況の報告をしていただいた。このとき学生がかなり真剣に話を聞いていたことから、8月4日の午後、「7.13水害に関する緊急報告集会」を開催し、学生に対し積極的に参加するよう呼びかけることとした。8月4日に設定したのは、前期定期試験の最終日であったことによるものであり、早めに開催しても学生は試験で動けないであろうという判断に基づくものであった。

当日の報告は次のようなものであった。

- ① 福山利範「新潟7.13水害：現地の状況」（7月16日、19日の農地被害視察報告）
- ② 川邊 洋「7.13豪雨災害調査」（山地災害を中心とした報告）
- ③ 三沢真一「7.13新潟中部水害報告」（農地被害を中心とした報告）
- ④ 早川嘉一・稲葉一成「7.13の降雨分布について」（降雨分布と水害についての報告）
- ⑤ 伊藤亮司「森光水害」（小国町森光集落の状況報告とボランティア提言）

参加者は60名程度で予想を下回ったが、これはそれぞれの定期試験が既に終わり、大学に出てきていない学生が多かったためと考えられる。

報告会のあとで、学生に対し「水害ボランティアに関するアンケート」を行った。回答件数39件のうち、「既にボランティア活動に参加した」が3名。このうち「大学を通して」1名、「ボランティアセンターを通して」2名となっていた。既に参加した者の数が極めて少ないが、その後、学生たちと個別に話をしていると、「部活やサークル活動の一環として参加した」、「民間のボランティアグループの一員として参加した」、「友達とボランティアセンターを通して参加した」、「災害にあった友人の実家の手伝いに行った」などという学生が多く、かなり多くの学生が自分なりにルートを見つけて参加していたのではないと思われる。また、「まだ参加していないが、今後参加したい」と答えた者が33名にのぼり、「参加する気はない」とした者はわずか3名であった。

このような結果から、われわれとしてもさらに積

極的にボランティアに参加するよう呼びかけようと
考えていた矢先、大学としては夏休みに入ったこと
からボランティア用のバスの運行を中止するとの情
報が入り、学生の中から不満の声が聞かれるよう
になった。

確かに8月上旬になると、これまでのボランティ
ア活動の成果もあって、被災地の中でも市街地はか
なり片付き、新聞紙上などでもボランティアセンター
の解散を伝える記事が掲載されるようになったし、
学生からも「ボランティアに参加しようと思って現
地へ行ったが、仕事がなかった」などの声も聞こえ
てくるようになった。

しかし、農学部としては、この段階において、独
自の動き——農学部だからできること——をしよう
と考えたのである。「マスメディアが伝えるように
市街地はほぼ片付いたであろう。しかし、マスメディ
アがあまり被害実態を報道しない農山村はどうなの
か。一般には知られていないが、農学部教員が行っ
た被害実態調査では今年の収穫はおろか、来年春の
農作業もできるかどうかかわからないところがたくさ
んある。新潟県の農業に最も密接に関係する農学部
が、一般のボランティア活動から見過ごされている
農山村に入り、いくらかでも手伝うべきではないの
か。来年春の作業に向けて、雪が降るまで続けて見
よう。」という発想であった。

(2)第1回水害ボランティア

このような考えをまず行動に移したのが、8月7
日の、農学部と地域交流協定を結んでいる小国町森
光集落への支援活動であった。これは伊藤亮司助手
が中心となって計画し、学生15名のほか、教員では
伊藤忠雄副学長、福山教授、岡島助教授、末吉助教
授、韓助手が参加した。作業内容は水田の周りにあ
る、土が詰まったU字溝の泥あげであった。この行
動を起こすにあたって、問題となったのが活動資金
であった。教員が自家用車を使って学生を乗せてい
くにしても、かなりのガソリン代がかかるし、いく
らボランティアとはいえ学生の昼食や水分補給のた
めの飲み物も用意したい。このようなことから教員
からカンパを募り、このような経費に当てることに
した。

(3)第2回水害ボランティア

第2回目の活動は、7.13水害から1月たった8月

13日に行った。これに先立って資金問題を解決する
ために井上事務長と相談し、農学部の公用車1台を
供与してもらうこと、ガソリン代は引率教員の自家
用車も含め農学部後援会費から支出してもらうこと
、昼食費等は後援会費およびカンパ資金でまかな
うこととした。

この2回目も森光集落であったが、学生15名のほ
か、引率教員として福山教授、森井助教授、伊藤亮
司助手と私の4名が参加した。参加学生の募集は夏
休み中であったことから、校舎内に募集のポスター
を張り出すとともに、報告集会において参加希望者
名簿に登録してくれた学生と連絡を取った。しかし、
ちょうどお盆に重なったことから帰省中の学生が多
く、募集にはかなり手間がかかった。

作業当日は雲ひとつない晴天で、炎天下でのU字
溝の泥あげは、砂利が40~50センチの厚さで堆積し
ていたこともあって大変な重労働であった。作業に
使ったシャベルは、前はFCセンター新通ステー
ションから借用したが、それだけでは足りないため、
本部から雪かき用のシャベルを借用し、水害ボラン
ティアが終わるまで使わせていただいた。

昼休みをかねて集落から奥に入り、沢沿いの棚田
の被害を見学したが、各所で小さな崩壊が見られた。
マスメディアが報道する大被害とは違うが、世帯数
も少なく高齢化が進んでいる集落の現状では、われ
われがお手伝いをしたU字溝の泥あげを含め、住民
だけで修復するには大きすぎる被害であると思え
た。

なお、簡単な当日の作業報告、災害現場の写真、
作業光景の写真を1階のロビーにパネル展示し、学
生の関心を促すようにした(第3回目も同じ)。

(4)第3回水害ボランティア

第3回目は8月23日に中之島町で行った。このと
きは農学部のバスを使い、学生18名と休暇を使って
遊びにきていた卒業生1名のほか、引率教員として
福山教授、伊藤亮司助手、韓助手と私が参加した。
作業はカントリーエレベーター周辺の水田側溝の泥
上げであったが、側溝に詰まった泥は重い粘土質で、
まるで箱に入った羊糞を切り出すような作業であっ
た。シャベルで掻き出すには重たく、ある程度の大き
さに切れ目を入れて、手で掻き出す方が早いよう
なこともあった。ここの水田は当時、1メートルも
の水に覆われたそうで、根に近い部分や葉先は黄色

くなり、稲穂も実っていない状況であった。また隣接した大豆畑は全滅で、無残な姿をさらしていた。また、洪水の直撃を受けた水田には大量の砂利が流れ込んでいた。

昼休みに市街地を回ったが、刈谷田川の堤防決壊の直撃を受けた地域では、住宅の1階は全て水に押し流され、墓石も倒壊し、織物工場であったと思われるところでは機械が泥まみれになるといった悲惨な状況ではあったが、罹災者のための仮設住宅の建設は終わり、各地からの支援物資の配給が行われていた。

この日は曇天で、また参加学生も多かったことから、作業は思っていた以上にはかどり、計画していた場所以外での作業も行ったものの、計画より早く作業を終えることができ、人手の数は力であることを実感した。

(5)第4回水害ボランティア

第4回は三沢教授に、砂利が入って機械の入らない水田の手刈りを手伝ってほしいとの連絡が見附市の農家から連絡があり、9月18日、19日に行った。しかし、連絡のあったのが17日午後であったため学生に連絡が取れず、18日は三沢教授以下学生数名、19日は伊藤亮司助手以下学生数名の参加にとどまった。18日は稲刈りの手伝いを行ったが、19日は雨天であったため糊摺りの手伝いを行った。

その後、三条市あたりでの活動も行おうと考えていた矢先に起きたのが10月23日の中越大震災で、これによって水害は人々の頭から飛んでしまい、この第4回をもって水害ボランティア活動は終わった。

2. 中越大震災に対する学生ボランティア活動

10月23日、この日私は伊藤忠雄副学長、伊東睦泰FCセンター長、高浜積雪地域災害センター長、福山教授、伊藤道秋教授、阿部教授等と、7.13水害の被害状況視察のため栃尾市に入っていた。夕方5時過ぎに地元の方々との集会を終えて帰り、研究室に戻った直後に6時半の余震がきた。恐ろしいほどの揺れで、早々に帰宅した。

農学部では25日に鈴木学部長、楠原副学部長、3学科長（祝前教授、渡辺教授、紙谷教授）、福山FCセンター企画交流部長、荒谷学務委員長、事務長などが集まり今後の対応を協議した。市街地等に対する一般的な支援活動は大学全体での活動に協力す

るよう学生に呼びかけることとし、農学部としては地域交流協定の締結先である小国町の支援を行うこととした。席上、福山教授から小国町とようやく連絡がつき、「家屋の倒壊もあるような大被害である」という話であったとの報告があった。しかし余震が続いていることもあって、農学部としての行動は様子を見つつ、またさらに情報を収集してから決定することとした。

11月2日に第二回目の会合がもたれ、席上、10月27日と29日の両日に小国町に入った福山教授から被害状況と森光集落から「休日はボランティアの人々も多くきてくれるが、平日は人手が足りない。学生ボランティアをお願いできないか」との要請があった旨の報告があった。これを受けて、また余震もかなり収まってきていることもあって、小国町への学生ボランティアの派遣を決定した。

但し、この条件として、次のような事項を決めた。

- ① 学生5～6名程度に引率教員1名がつき、何かあったときは勿論のこと、小国到着時、作業開始時、昼休み、作業終了時、小国出発時には必ず農学部へ連絡を入れる。
- ② ボランティアセンターを通して行動する。
- ③ ボランティアセンターではボランティア保険に加入するとともに、学研災保険にも加入させる。
- ④ 学生は必ずグループで行動させ、引率教員は常時その状況把握に努める。
- ⑤ 危険防止のためヘルメット、ゴム引き軍手を支給し、ヘルメットは常時着用させる（ヘルメットは農学部本部にないため、ゴム引き軍手とともに新たに購入した）。
- ⑥ 明らかに危険と思われる作業は行わない。

第1陣として状況視察を兼ねて、11月4日に伊藤亮司助手の引率で学生8名が出発した。このうち2名が森光集落に宿泊し、翌5日に同じく伊藤亮司助手の引率で6名が出発した。しかし、ボランティアセンターに着くと、平日はボランティアが足りなくて困っているとの情報とは異なり、仕事がないので待機してくれとのことと、参加した学生は拍子抜けの体であったらしい。このため1日目は森光集落内を回り、公園の修理とシートかけ、崩壊した石垣の撤去などを行い、2日目は家財道具の持ち出し、公民館の整理等の作業を行った。

このように小国町の地震災害の支援に2日間赴い

たが、少なくともボランティアセンターで「平日でも人手は足りている」といわれたことから、その後はボランティアセンターからの要請があるまで学生の派遣は見送ることとした。但し、その後の派遣要請はなかった。

また、農学部では被災地周辺に実家などのある学生を対象に被害調査を行った。対象学生66名のうち家屋、家財等に被害を受けたものが18名おり、彼らに対し何らかの支援を行おうということで、必要があればここにもボランティアを派遣することにした。この呼びかけに対し支援要請をした学生は1名であったが、これについては大山教授、末吉助教授が研究室の学生を引率して、11月7日に被害学生の実家である長岡に出向いた。

3. まとめ

農学部では、われわれだからできることをしようということで、一般のボランティアでは省みられない農村地帯に入り込んだ。しかし、大きな被害を受けたところは、われわれのような素人の手には負えない。そこで考えたのが、人力をもってすれば何とかかなり、また来年の生産にも役立つ側溝の泥揚げといった仕事であった。このような機械ではできず、また農村部の高齢化の中では住民への負担があまりに大きい仕事に目をつけたのである。

しかし、「このような仕事があればお手伝いしたい」との連絡を市役所、町役場に入れても（このような作業は福山教授が行った）、相手は戸惑うばかりであった。これは彼らとしてもボランティア活動は市街地で行われるものとの思いがあり、まさか農村部にボランティアが来るとは考えていなかったためである。また、市役所、町役場にしても大きな被害の現場対応に追われ、泥に埋まった側溝の被害状況など、必要ではあるが調べる余裕がなかったということもあろう。

このようなことからすれば、農学部としてはこれまで以上に現場と密接な関係を取り、何かあれば、また、こういう仕事であれば農学部の学生に頼もうという、お互いの信頼関係を築いていくことが必要なのではないかと思われた。

また、震災に関しては受け入れ側の体制整備の必要性を痛感した。参加した学生によると、「ボランティアセンターでは仕事はないといわれたものの、町や集落の中を歩けば自分たちにできそうなことは

いくらでもある」とのことであった。住民は災害のあまりのショックに気が動転し、何から手をつけたらよいのかわからないといった状況だったと思われる。そのような状況であるからこそ、ボランティアセンターは住民の要求をこまめに発掘する必要があるのではないかと思われた。

水害ボランティアのときは2次災害を考える必要はなかったが、震災ボランティアを送り出したあとは「何か起こっているのではないか」との心配が絶えず気持ちの中にあり、落ち着かない2日間であった。震災ボランティアの場合、全く安全になってからでは仕事もなくなり、かといって危険な場所に学生を送り出すこともできず、この判断が極めて難しいと思う。

今後、有事の際（このようなことはあってほしくはないが）、どのように学生ボランティアを組織すればよいのかを考えるうえで、暗中模索しながら行った今回の活動が何らかのヒントになれば幸いである。

なお、今年に入り、2月10日に第1食堂において参加学生を集めて災害ボランティアの反省会を行った。席上、自分と社会とのつながりやボランティアとは何かといった話題で盛り上がったが、これからみても学生たちがそれぞれ「何か」をつかんでくれたと考えられる。参加してくれた学生のうち何人かが書いてくれた感想文を掲載してあるので参考にさせていただきたい。

最後に、これらのボランティア活動に参加してくれた学生諸君に感謝したい。